

序

鹿児島県総合教育センター
所長 獅子目 博文

現在、子どもたちを取り巻く社会状況の変化や価値観の多様化等により郷土学習を推進する基盤が弱くなってきていると言われる。今回の調査においても、郷土学習の担い手である教職員が、郷土学習の素材についてその存在を知らなかったり、郷土素材を有効に活用するすべを知らなかったりする面が見られるなどの課題も出ている。

今回の学習指導要領（平成 10 年告示）では、国民としての自覚と誇りをもった「国際社会に生きる日本人の育成」が示され、郷土や国への理解と愛情をもち、異文化を理解し、世界の人々と共に生きていこうとする子どもを育成することが求められた。

本県においても、郷土学習の推進が重要であるとの観点から、過去「山坂達者」や「一日一汗」を初めとし、「郷土に根ざす学校づくり推進事業」(平成 9・10 年度)など様々な施策を講じてきており、各地域や各学校ではそれぞれの特色を生かした教育活動が推進されてきた。さらに、平成 13 年 2 月には、「新世紀カリキュラム審議会」から答申が出され、その中で、これからの学校には、地域の実情を踏まえて創意工夫を凝らし、体験的な学習を充実させるなど、特色ある学校づくりを主体的に進めていくことが期待されている。また、「郷土への理解を深め、愛情を培う学校」が視点の一つとして示され、郷土学習の更なる推進が求められた。

郷土学習は総合的な学習の時間をはじめ全教育活動で進められるものであり、当教育センターにおいても「共に育ち、共に学ぶふるさとの教育」(平成 11 年度)や「創造的な学習活動の在り方」(平成 13 年度)を『教育研究』の特集として取り上げ、郷土学習の推進について問題提起をしてきた。

今回の研究は、これら過去の研究を基にしながら、教科指導における郷土学習の在り方について追究したものである。学校や地域の特色を生かした保育、学習指導を展開するには、幼稚園教育要領及び学習指導要領の目標を達成するように、身近にある郷土素材を活用していくことが重要である。ここでは、幼稚園教育としての保育と音楽、図画工作、美術、体育、保健体育、家庭、技術・家庭科の学習指導に焦点を当て、教科等の目標達成を目指し、郷土素材を発掘し、それらの教材化を図り、指導計画に位置付け、学習指導の在り方について追究したものである。

各学校が取り組む教科指導における郷土学習の一助になれば幸いである。

平成 15 年 3 月